

## 21世紀の日本のかたち（13）

### --- 皇居を世界遺産に - 東京の姿形について考える <その1> ---



戸沼幸市  
<(財)日本開発構想研究所 理事長>

#### 1. 日本の象徴空間としての皇居

国のかたちは首都の姿形に現れます。パリ（フランス）、ロンドン（イギリス）、ベルリン（ドイツ）、ワシントン（アメリカ）、ブラジリア（ブラジル）、北京（中国）、ハノイ（ベトナム）、カトマンズ（ネパール）、ナイロビ（ケニア）……。このように名を挙げてゆけば、現在、200もの首都がそれぞれの国の歴史と現在のかたちを表し、未来をも暗示しています。

東京を首都とする日本においても、21世紀、改めて国のかたち、つまりは機械仕立ての東京のかたちをいかにエコロジカルに再生するかが問われています。

首都東京は、今や半径60kmに拡がり、3,500万人の居住する巨大都市ですが、そもそもは関東平野の絶妙な一点に落とされた一粒の都市の種が芽吹き、成長したものです。

その一点とは、星雲の様に広がった巨大都市のまさに中心部に、台風の目の様に静かな「虚」の中心として在る、皇居です。

今年、平成21年の正月も早々に、皇居長和殿バルコニーには、天皇、皇后、皇室ご一家が立たれ、大勢の一般参賀に訪れた人々に手を振っておられました。戦後続いている日本の平和な正月風景で

す。

この正月にも皇居周辺のお堀端では早朝ジョギングの人々も多く、家族連れの市民が散策を楽しみ、外国人観光客は、大手門や二重橋越しに日本の首都の象徴空間である皇居を盛んにカメラに納めていました。

ただ、隣接の日比谷公園に設けられた「年越し派遣村」に、世界の金融危機ではじかれ、仕事と住まいを失った人々が溢れていたのが、例年の正月風景には見られなかったことでした。

#### 2. 皇居を世界遺産に

21世紀、多方面にグローバル化が進む中で、各国は互いの共生関係をどの様に築くのか、逆に言えば、自国のアイデンティティをどう主張するのかが問われています。

このような時に、日本の首都東京の姿、形、景観づくりを通して、世界に日本のかたちをはっきりとしたメッセージとして送るべきだと考えます。例えば「皇居を世界遺産」というアイデアはどうでしょうか。

現在の皇居は江戸城を引き継いだものですが、これは1457年（長祿元年）太田道灌によって創築され、1590年（天正18年）徳川家康がここを居城として、江戸開府の拠点とした所です。現代に

残っている江戸城の総構は、徳川三代の間に整備されたものとされています。

この場所は武蔵野台地に続く山の手台地が海（江戸湊）に落ち込む際、台地と海の接点にあります。この地点に江戸幕府の中心、江戸城を置いたことにより、江戸という近世日本を代表する都市が誕生しました。徳川幕府は海（東京湾）からの水と、神田川、玉川上水からの水を巧みに取り込んで、内濠、外濠を巡らして築城し、全国統治の中心としたのです。

この中心地をテコに、江戸の街は渦巻き型に発展し、当時、ロンドンと並ぶ100万都市にまで成長しました。江戸は前機械時代、自然エネルギーと自然資源の循環を構造化してつくられたエコシティです。

そして、1868年（明治元年）、江戸から明治へ、京都、西の京から東の京、東京へと遷都がなされ、江戸城は天皇の座、皇居となりました。これを機に日本は開国し、近代化国家づくりに向けて、まず首都東京の姿形を整えてゆきました。そのやり方は、江戸城のかたちを引き継いだ皇居を中心に、その周辺に国会（議事堂）、政府省庁、最高裁判所などの近代の首都機能を配し、首都としての拠点性を高めてゆきました。直近に東京駅をつくって全国鉄道網につなげたのも皇居を国の中心とするための基礎的作業でした。明治期の首都づくりとしては、多く欧米風ですが、皇居だけが古来の日本の首都の儀式性（奈良・京都の伝統）を保持しつつ、近世武家の構えを踏襲しているところが日本式の面白いところです。

超高層の林立する現代の東京にあって、皇居だけは緑に包まれた庭園の中の低層建築を保つのもユニークです。また、ヨーロッパの首都の宮殿が、華美に装飾的なのも対照的に、自然と向き合う素朴さを皇居が保ちつづけているのも日本的です。

### 3. 皇居を世界遺産とする範囲と理由

範囲は、まず皇居：内濠から内側の空間とし、内濠から一皮外側は皇居につづく首都の顔として東京都心景観重要地区といったものを想定します。

理由として、

- ①日本の首都として、近世・近現代史を生き抜いてきた国家の象徴空間である。
- ②世界の国々の首都表現と比較して、これらと全く異なる独特な日本特有の「和」の空間である。
- ③世界の国々の首都エリアが、建物の充った「実」中心であるのに対し、皇居は東京都心の水面をもつ緑のオープンスペースであり、いわば「虚」中心である。これは今後の東京のエコシティ化の起点になる。

内濠から内側には、皇居前広場、皇居東御苑などは市民に開放され、国の文化財指定の国民公園であり、また、江戸城址は特別史跡に指定されていますが、これを含んで皇居をあえて世界遺産として世界にアピールすることに今日的意味があると考えます。

皇居を改めて世界遺産とすべしという理由は、21世紀の国のかたち、日本の首都のかたちとその意味を端的に世界大に発信すべきと考えるからです。

先日亡くなったサミュエル・ハンチントン<sup>1</sup>氏は、地球文明の8分類の一つに日本文明を挙げて特筆していましたが、まさにその証明にもなりましよう。

皇居は既にエコロジカルな空間としての特徴を持っており、これからの東京景観を考えてゆく上での重要地区ですが、その外側の市街地をやみくもに超高層化するのではなく、東京のスカイラインについて踏み込んで検討し、これと調和するよ

うに都心重要景観地区と考え、景観誘導をすべきと考えます。

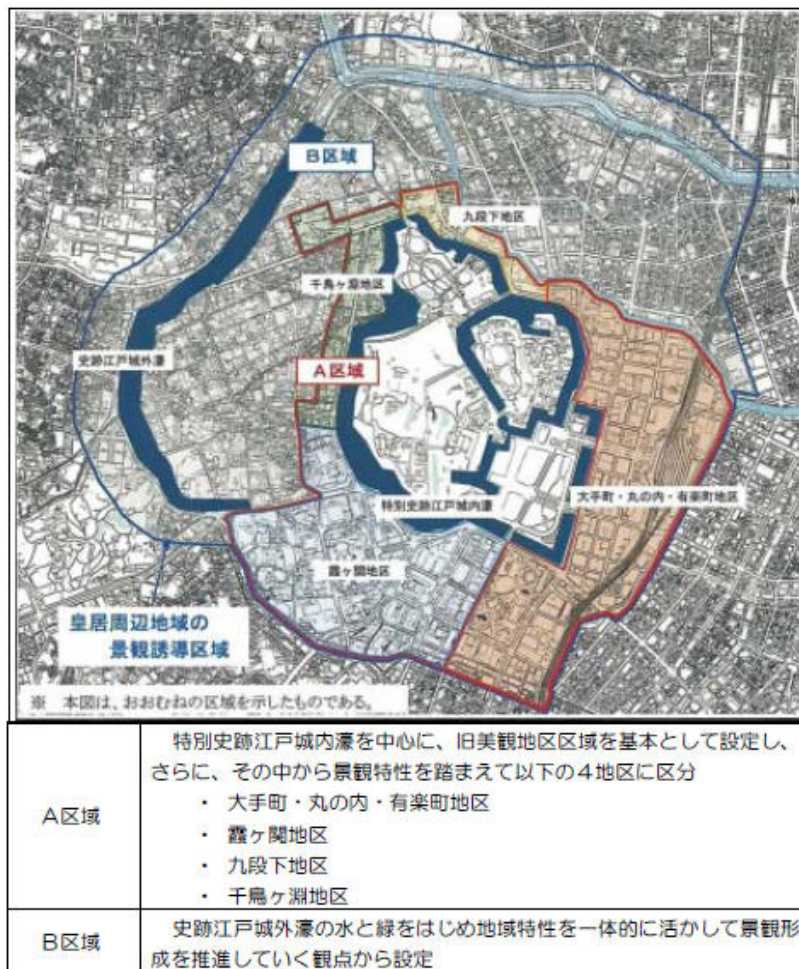
これについては、東京都景観審議会が今年の景観計画の中に、皇居を中心とした景観づくりに取り組み、これを景観誘導地区に指定して、この四

月から一定の施策を行おうとしています。これが実効性あるものとなることを期待したいと思います。

(2009年01月15日)

<sup>1</sup> Samuel Phillips Huntington, (1927年4月18日～2008年12月24日)は、世界的なベストセラー「文明の衝突(原題・文明の衝突と世界秩序の再編)」などの著書で知られる米国の政治学者アメリカ合衆国の政治学者。コロンビア大学「戦争と平和」研究所副所長を経てハーバード大学教授。

### 皇居周辺地域の景観誘導区域



資料：「東京都景観計画の変更(案)－皇居周辺の風格ある景観誘導－」東京都都市整備局